年を重ねても、住み慣れた地域で住み続けたい

地域包括ケアシステム構築への取り組み

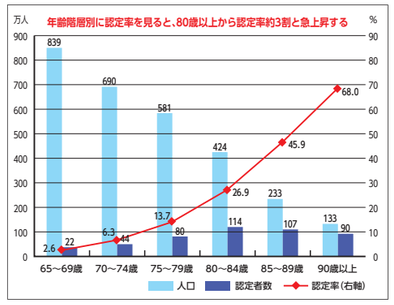
「いつまでも健康で自立した生活を送りたい」、「医療や介護が必要になっても住み慣れたまちで暮らしたい」、このような思いを抱く方は少なくありません。自分らしい生活を続けていきたいという願いをかなえる為の新たな取り組みが「地域包括ケアシステム」です。

高齢化社会の現状

現在、日本では、諸外国に例を見ないスピードで高齢化が進んでいます。本市でも同様に高齢化率が高まっており、平成28年9月1日現在で28・3％を超えています。いわゆる「団塊の世代（昭和22年～昭和24年生まれ）」が75歳以上になる2025年（平成37年）には、市民の3人に1人が65歳以上の高齢者となる見込みです。

この2025年における問題点は、高齢者人口が増加すること、支援が必要となる高齢者が増えることにあります。医療、介護を必要とする方々が増える反面、それを支える世代の減少が推測されており、高齢者の生活をいかに支えていくかが大きな課題となっています。

高齢者人口と要介護認定率



【出典】介護保険事業状況報告

2025年問題を解決するために

厚生労働省は、団塊の世代が75歳以上となる2025年を目途に、高齢者の尊厳の保持と自立した生活の支援を目的に、可能な限り住み慣れた地域で、自分らしい暮らしを人生の最期まで続けることができるよう、住まい・医療・介護・予防・生活支援が一体的に提供される体制「地域包括ケアシステム」の構築を進めています。2025年問題を解決するための鍵を握るこのシステムは、今後増加が見込まれる認知症高齢者のケアや地域での生活を支える上でも重要です。「地域包括ケアシステム」は、高齢者が住み慣れた場所で生活を続けることを支援するものであることから、保険者である地元自治体が地域の自主性や主体性に基づき、地域の特性に応じて作り上げていくことが求められています。

地域包括ケアシステムをイメージした「植木鉢」

生活の基盤となる「住まい」「生活支援」をそれぞれ植木鉢、土と捉え、専門的なサービスである「医療」「介護」「予防」を植物と捉えている。「住まい」が提供され、安定した生活を送るための「生活支援」があることが基本的な要素となる。そのような養分を含んだ土があって初めて専門的サービスが効果的な役割を果たすことができる。

地域包括ケアシステム構築に向けて

このシステムでは「本人・家族の選択と心構え」が非常に大切です。住み慣れた地域で暮らし続ける方法として、在宅や施設利用などの選択肢があります。どのような生活を送りたいか、高齢者本人や家族が考え、互いに理解し、心構えを持つことが必要です。

この「本人・家族の選択と心構え」を土台とした上で、地域包括ケアシステムは①すまいとすまい方　②生活支援・福祉サービス　③介護・リハビリテーション　④医療・看護　⑤保健・予防の5つの構成要素で成り立っています。

5つの構成要素とは

5つの構成要素について、3つの観点から解説します。

すまいとすまい方（①）

生活の基盤として必要な住まいが整備され、本人の希望と経済力にかなった住まい方が確保されていることをいいます。高齢者のプライバシーと尊厳が十分に守られた住環境が必要です。

生活支援・福祉サービス（②）

心身の能力の低下、経済的理由、家族関係の変化などがあっても尊厳ある生活が継続できるよう生活支援を行うことをいいます。生活支援には、食事の準備など、サービス化できる支援から、近隣住民の声掛けや見守りなどのインフォーマルな支援まで幅広く、担い手が多様です。

生活支援サービスの様子

介護・医療・予防（③～⑤）

個々の抱える課題に合わせて「介護・リハビリテーション」、「医療・看護」、「保健・予防」が専門職によって提供されることをいい、連携し、一体的に提供されるのが望ましいものです。これは、ケアマネジメント（支援計画）に基づき、必要に応じて生活支援と一体的に提供されます。